

図書館の宝物から(その2)

## ジョージ・コールマン・ガウ著の 音楽理論書『音楽の構造』(1895年頃)

津 上 智 実

神戸女学院の図書館には貴重な資料が多いが、その中には明治期の音楽教育の実態を知る手掛かりとなる掛け替えのないものも含まれている。そんな「図書館の宝物」をシリーズで紹介してみたい。

初回はヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版を紹介したが、今回は音楽理論書を取り上げてみよう。ジョージ・コールマン・ガウ(George Coleman Gow)著『音楽の構造、豊富な図解と例題を伴った記譜と和声に関する基本的な教本、教室および自習用(*The structure of music: an elementary text-book on notation and harmony, with full illustrations and abundant exercises; for use in the class-room, and for self-instruction*)』、ニューヨーク：シャーマー社、1895年頃(New York: G. Schirmer, c. 1895)がその書である。

この本の存在に気がついたのは、神戸女学院27回生のピアニスト小倉末子<sup>②</sup>(1891-1944)の研究を通じてであった。1907年から1924年に至る音楽部のレッスンを記録した『音楽部レッスン帳』<sup>③</sup>には、小倉末子の記録が4ページあり、その最後のページに「実質的にガウの『音楽の構造』を終えた(Practically completed Gow's "Structure of Music")」とのペン書きの記入がある。筆跡は当時の教師の一人で、後に第5代神戸女学院院長となるシャーロット・バージス・デフォレスト(Charlotte Burgis DeForest, 1879-1973)のものである【写真1】。

*Practically completed Gow's "Structure of Music."*

写真1 『音楽部レッスン帳』より小倉末子のページの一部。

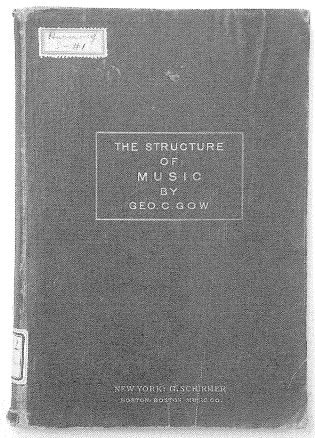


写真2 ガウ著『音楽の構造』[青本]



写真4 ガウ著『音楽の構造』[緑本]

*Kobe College.  
Music Department.  
Teacher's Copy.*

写真3 青本の表紙裏の書込み

*Charlotte B. DeForest  
Smith 1901*

写真5 緑本の表紙裏の書込み

そこで、この本の所在を調べたところ、本学の音楽図書室に2冊が残されていた。内、一冊は、青い表紙に金文字でタイトルが浮び上がる装丁で【写真2】、表紙裏には「神戸女学院音楽部、教師用(Kobe College. Music Department. Teacher's Copy.)」のペン書きの書き込みがある【写真3】。この筆跡もデフォレストのものである。

もう一冊は、濃緑の地味な装丁で【写真4】、表紙裏に「シャーロット・B. デフォレスト、スミス、1901年(Charlotte B. DeForest, Smith, 1901)」とのペン書

きの書き込みがあることから、デフォレストがスミス・カレッジ在学時(1897年入学、1901年卒業<sup>④</sup>)に学んだ本と考えられる【写真5】(以後、前者を青本、後者を緑本と呼ぶ)。

青本にも緑本にもさまざまな書込みがあり、よく使われたことが窺われる。これらから、ガウ著のこの音楽理論書は、デフォレストがアメリカの大学で学んだ本の一冊であり、赴任後、それを女学院の教育で用いたものと推測される。

ガウ著『音楽の構造』は、B5版、200ページで、「第1部：記譜法」と「第2部：和声」の2部から成る。「第1部：記譜法」(7-59頁)は「A. ピッチについて」「B. 音価について」「C. ダイナミクスについて」「D. 音色について」の4章に分けられ、各トピックについて、シューマンやショパン、メンデルスゾーン等の実例を交えながら説明が進められている。

「第2部：和声」(61-193頁)は、「和声構造(音程、和音等)」「和声進行」「非和声音」「声部書法」「分析」「数字付低音」「結論」の7章に分けられ、「和声進行」については「調性、協和音の用法、不協和音の用法、終止形、転調、ゼクエント、半音階ないし変化和音、転調」まで、「非和声音」については「経過音、掛留、アッポジャトゥーラ、保続音、非和声進行における自由、予備と遅延、省略」までが論じられている。第2部においても、バッハからブラームス、ヴァーグナー、サン＝サーンス、グリーク等の曲例が豊富に引かれて、実作品に即して学ぶよう配慮されている。

巻末(194-200頁)には、音楽用語索引が備えられている。

## 音楽理論の教育

本学の教育において、この音楽理論書はどのように使われたのであろうか？小倉末子一人の教育に用いられたのか、あるいは他の学生たちも学んだのであろうか？

この問いに答えるには、本に残る当時の成績表『学生成績簿(1903-1911)』がよい手掛かりを提供してくれる。これを見ると小倉末子は、1910年3月に神戸女学院を卒業した後の1年間(1910年度)、「特待生(special)」として「聖書

(Bible)」「英語(English)」「音楽理論(Music Theory)」「音楽史(Music History)」の4科目を履修し、いずれにおいても優秀な成績(評点で8から9.1)を収めている。

この『学生成績簿(1903-1911)』によれば、「音楽理論(Music Theory)」を履修して成績を与えられている学生は、表1(「音楽理論」履修生一覧)の通りである。

表1 「音楽理論」履修生一覧

1909年度	1910年度	1911年度
	Suzuki Tatsu (C3)	Suzuki Tatsu (C4)
Nagamatsu Sada (C1)	Nagamatsu Sada (C2)	
Ogura Sue (C1)	Ogura Sue (C2)	
	Julia Song (C2)	Julia Song (C3)
	Murata Kikusa (A5)	
	Kozaka Mitsu (A3)	Kosaka Mitsu (A4)
	Hirao Michi (A2)	
	Sawaya Misao (A2)	Sawaya Misao (A2)
		Mikami Mitsu (Special)
		Tsushima Shizue (A3)

凡例：C= College Course, A=Academy Course を指し、それに続く数字は学年を示す。  
 なお、カレッジ・コースは大学部、アカデミー・コースは高等科を意味する。

ここから、音楽理論の授業は1909年に永松貞と小倉末の2名を対象として開始されたことが分る(これ以前に「音楽理論」で成績を与えられた学生はいない)。1910年には、この2名に鈴木多津、ジュリア・ソン、村田きくさ、上阪みつ、平尾美知、さわみさおの6名が加わって、履修者が8名に増えている<sup>⑤</sup>。1911年には、前年から継続して履修した4人(鈴木多津、ジュリア・ソン、上阪みつ、さわみさお)に、三上 光、つしましずえの2名が加わって計6名となっている。受講生の大半は、永松 貞(1909、1910年履修)、小倉 末(1909、1910年履修)、鈴木多津(1909、1910年履修)、上阪みつ(1910、1911年履修)、さわみさお(1910、1911年履修)と2年ずつ履修しており、この授業は基本的に2年間で完結したと考えられる。

その後の履修状況については、『学生成績簿(1903-11)』では知ることができない。そこで『音楽部レッスン帳(1907-1923)』に目を転じて、その中から音楽理論関係の言及を抜き書きしてみると、表2(『音楽部レッスン帳(1907-1923)』に見る音楽理論書への言及)のようになる。

まず、A表を見ると、ガウのテキストによる教育は、ジュリア・ソンに対し

表2 『音楽部レッスン帳(1907-1923)』に見る音楽理論書への言及

(A表：ガウ、B表：その他)

A：ガウの音楽理論書への言及

1911	冬学期	Ogura Sue: Practically finished Gow's ' <u>Structure of Music</u> '
		Kitagawa Yoshi: Finished Gow's " <u>S. of M</u> ".
		Nagamatsu Sada: Practically finished Gow's ' <u>Structure of Music</u> '
	6月	Murata Kikusa: In theory, she practically completed Gow's <u>Structure of Music</u> , without very thorough skill, however.
1913	秋学期	Julia Song: Theory: Gow, Task I-IX
1914	春学期	Julia Song: Theory: Modulations through a common chord, from Gow
		Wo Be-Lan: Theory: Gow's <u>Structure of Music</u> , Dissonant Chords Resolving to Tonic, Modulations through a Common Chord
	秋学期	Asano Fumi: Theory: Gow's Harmony (without text-book)
	冬学期	Sano Shizu (Mrs. Kanai): Theory: Intervals, Chords, Cadences, etc, preparatory to Gow's <u>Structure of Music</u> , Part II, which was began in Jan. 1914. Tasks I-III.
1915	春学期	Sano Shizu (Mrs. Kanai) Theory: Dissonant Chords resolving to the Tonic.
	秋学期	Harada Hana: Harmony: Class B, Writing 4 part cadence-group, principal & subordinate chords in fundamental position (Gow's <u>Structure of Music</u> , Tasks 1&2)

B：その他の音楽理論書への言及

1914	春学期	Ryo Shukke: Theory: Same as Ishikawa, p.67
	秋学期	Ishikawa Shizu: <u>Gakuten Kyokasyo</u> (Tamura Torazo) pp.1-33
1915	秋学期	Ishikawa Shizu: Finished above textbook. Kitamura's <u>Gakuten Kyokasyo</u> , No.4, begun.
1917	冬学期	Hasegawa, Tsuya: <u>Elson's Theory</u> , History, Finished Ear-training.
1920	冬学期	Arita Toshi: Finished <u>Elson Theory</u>

ては1914年の春学期まで継続して行なわれ、そこにウォー・ベランが加わったことが分る。この2名はいずれも東アジアからの留学生と考えられる。日本人学生については、浅野ふみ(1914年秋学期)、さの静(金井夫人静、1914年冬学期)、花田花(1915年秋学期)に散発的な言及があるのみである。

一方、B表を見ると、1914年春学期から田村虎造・田中正平編著『近世楽典教科書』(大阪：開成館、1901年)や北村『楽典教科書』(詳細不明)といった日本語のテキストを用いた授業が始まっている。1917年以降はエルソンの理論書<sup>⑥</sup>が用いられており、その後、ガウの名前が言及されることはない。

以上から、ガウのテキストを用いた音楽理論の授業は、1909年に開始され、1910年に最も多くの履修生を集め、その後、漸減して、1915年に終わっていることが明らかになった。

### デフォレストによる音楽教育

女学院に音楽科を創設した功労者エリザベス・タレーは、1909年の春、目を痛めて離任し、ドイツ経由でアメリカに帰っていった。その後、ピアノのレッスンを引き継いで担当したのがデフォレストであることは、すでに明らかにした通りである。<sup>⑦</sup>

他方、1915年といえば、デフォレストが第5代院長に就任した年である(院長在任期間は1915年から1940年)。

ガウのテキストによる音楽理論の教育が1909年に始まり、1915年に終了しているのは、このデフォレストの立場の変化と無関係ではあるまい。すなわち、ガウの教科書を用いて音楽理論の授業を行ったのは、デフォレスト自身であったと推測される。青本の表紙裏の「神戸女学院音楽部、教師用」という書込みがデフォレストの筆跡であることも、この推測を裏打ちする。

竹中正夫『C. B. デフォレストの生涯』には「一年間であったがピアノと音楽理論を教えるとともに音楽科の主任の仕事をしている」(46ページ)と記されているが、現存するこれらの史料が語るところに耳を傾ければ、デフォレストによる音楽科の授業担当は、ピアノ・レッスンについても、音楽理論について

も、1909年から1915年に及ぶと考えるのが妥当である。音楽科の教育に対するデフォレストの貢献については認識を改める必要があるだろう。

## 著者のガウと神戸女学院

ところで、この本の著者ジョージ・コールマン・ガウ (George Coleman Gow, 1860-1938) は、一冊の教科書の著者というに留まらず、神戸女学院と直接的な関係を有している。それを教えてくれるのは、岡田山キャンパスへの移転を記念して出版された『神戸女学院新築記念帖』(神戸女学院、1934年<sup>⑧</sup>)である。そこにはガウについて、「リヒヤード・ウアグネル胸像(在音楽館階段踊場壁間) ジョージ・コールマン・ガウ記念」という一項が設けられて、次のように記されている(86-87ページ)。

1860年11月27日生誕。ブラウン大學に學び、1884年にバチエラー・オヴ・アーツを受く。1889年、ニュートン神學校卒業。1903年、音楽博士[号]を贈られた。1889年から95年まで、スミス大學音楽教授。1895年、ヴァッサー大學音楽教授となり現在に至る。1912年から13年まで、全国音楽教師協会々長。「音楽の構造」の著者。

ガウ博士夫妻は1930年、校舎新築計画中に本學院を来訪。博士を記念する爲に夫人グレイス・チエスター・ガウ(Grace Chester Gow)から贈った寄附金で音楽家列伝胸像を完成した。

ここから、ガウ夫妻は1930年に神戸女学院を訪問し、その夫人の寄附によって、1933年に岡田山キャンパスが完成した暁に、音楽館(現在の音楽館1号館)の階段室(建物の東端部分)の踊場にガウ博士を記念するヴァーグナーの胸像が飾られたことが分る。『神戸女学院新築記念帖』には、この胸像の写真も掲載されている。残念なことに、胸像そのものは阪神淡路大震災で失われたと伝えられ、現存しない。

ガウについては、ヴァッサー・カレッジのニュース・レター第22巻第22号

(1938年1月15日)に掲載された追悼記事<sup>⑨</sup>が詳しい。それによれば、ガウは1860年に牧師ジョージ・ボードマン師とルーシー・マーストン・ヴァッサーとの息子として、マサチューセッツ州のアイエに生まれた。1895年から1932年までの37年間、ヴァッサー・カレッジで音楽教授として教え、音楽学部長としても功績があった。作曲、指揮、執筆に活躍し、退職後は同カレッジの名誉教授であった。

これらの記述から分るように、ガウはデフォレストのスマス・カレッジ在学時(1897年入学、1901年卒業)にはすでにヴァッサー・カレッジに移っており、両者の間にどのような関係があったのかは目下のところ不明である。ガウがスマスで非常勤講師として引続き教えていた可能性や講演等で訪問した可能性が考えられる。

しかし、緑本の表紙裏の書き込みに「シャーロット・B. デフォレスト、スマス、1901」とあることから、いずれにせよスマス・カレッジ在学中にデフォレストがこの教科書に接したことは間違いがない。緑本の第2部には、鉛筆書きの多数の書き込みがあり、和声進行の良し悪しについてのメモ書きや、実際に練習問題に取り組んだ痕跡がびっしりと残されている。書き込みは185ページにまで及んでおり、一定期間に亘って音楽理論を専門的に学んだことが窺われる。

## 終わりに

ガウの音楽理論書『音楽の構造』と、関連の現存史料の記載内容とを付き合わせていくことによって、このテキストによる教育が1909年から1915年まで本学において行なわれたこと、その担当者はおそらくデフォレスト自身であったことが分ってきた。

さらに、著者のガウは1930年に女学院を訪問し、その夫人の寄附によって、1933年の岡田山キャンパス完成時には、音楽館階段室の壁龕に「ジョージ・コールマン・ガウ記念ヴァーグナー胸像」が設置された<sup>⑩</sup>。

かくして、図書館の書架に眠る二冊の古い本を繙いて、ゆっくりとページを



繰っていくと、そこから百年前の音楽教育の一端が浮かび上がってくる。今は誰も使うことのないこの音楽理論書の中には、ガウ先生とその教えを学んだデフォレストとの、そして女学院でのデフォレスト先生とその教え子たちとの授業の痕跡が静かに封印されている。古ぼけた本の向こうに、これだけ豊かな人間関係が秘められているのである。本とは不思議な存在である。

## 註

- ① 津上智実「図書館の宝物から(その1)シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』（ピアノ独奏用編曲版）』『学院史料』第24号（2010年10月）、35-42ページ。
- ② 戸籍上は「小倉 末」であるが、3冊のピアノ曲集の著者名として、また演奏会プログラムの多くで「小倉末子」と表記しているため、ここでは基本的に(引用の場合を別として)後者を用いる。
- ③ 津上智実「神戸女学院音楽部レッスン帳(1907～1923)の資料的価値とその内実」『論集』第57巻第2号（2010年12月）、141-153ページ。
- ④ 竹中正夫『C. B. デフォレストの生涯』創元社、2003年、38-39ページ。
- ⑤ 卒業生名簿で漢字表記が分かる人物については、その表記を採用し、(中途退学等のため)卒業生名簿に記載のない人物については、平仮名書きとする。
- ⑥ Louis C. Elson, *The theory and music*, Boston: New England Conservatory of Music, 1914.
- ⑦ 註③に掲げた論文の147ページを参照。
- ⑧ 日本語版と英語版の2種が出版された。英語版は次の通り。C. B. DeForest, ed., *Handbook of memorials and commemorative gifts in the new Kobe College plant at Nishinomiya, Japan : comp. for the dedication*, Kobe College, 1934.
- ⑨ *Vassar Miscellany News*, Vol. XXII, Number 22, 15 January 1938.
- ⑩ 神戸女学院創立150周年(2025年)に向けて、一連の胸像(バッハ、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ヴァーグナーの4体)の復元が望まれる。

謝辞) 本稿執筆の基礎研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号22520164「ピアノの誕生を考える：明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明」および神戸女学院大学研究所2012年度「研究助成」(研究課題：明治期の本学音楽教育史料の調査研究)によって支えられていることを感謝して記す。

(音楽学部教授)